

深川淺景

泉鏡太郎

青空文庫

あまあがり
 雨霽の梅雨空、曇つてはゐるが大分蒸し暑い。——日和ひよりぐ
せ癖で、何時なんどきぱら〜と來こようも知れないから、案内者あんないしやの同つ
れ伴も、私も、各自おの／＼蝙蝠傘かうもりがさ……いはゆる洋傘パラスルとは名のなれない
 のを——色いろの黒くろいのに、日ひもさゝないし、誰たれに憚はゞかるともなく、す
 ぼめて杖つゑにつき、足駄あしだで泥濘ぬかるみをこねてゐる。……
いいで、戦場せんぢやうに臨のぞむ時は、雑兵ざふひやうと雖いへども陣笠ぢんがさをいたゞく。
み峰入みねいりの山伏やまぶしは貝かひを吹ふく。時節じせつがら、槍やり、白馬しろうまといへば、モ
いダンとかいふ女をんなでも金剛杖こんがうづゑがひと通り。……人生じんせい苟やしくも永えいた
い代わたを渡わたつて、辰巳たつみの風かせに吹ふかれようといふのに、足駄あしだに蝙蝠傘かうもりが
は何事なにごとだ。

何うした事か、今年ことしは夏帽子なつぼうしが格安かくやすだつたから、麥稈むぎわらだ
けは新しいのをとゝのへたが、さつと降ふつたら、さそくにふとこ
ろへねぢ込まうし、風かぜに取とられては事ことだと……ちよつと意氣いきには
かぶれない。「吹ふきますよ。ご用心ようじん。」「心得こころえた。」で、耳みみ
へがつしりとはめた、シテ、ワキ兩りやうにん人。
藍あゐなり、紺こんなり、萬筋まんすぢどころの單衣ひとへに、少々せうく綿入めんいりの紹ろの
羽織はおり。紺こんと白しろたびで、ばしやくとはねをあ上げながら、「それ又また
水みづたまりでござる。」「如何いかにも沼ぬまにて候さくらふ。」と、鷺歩行さぎあるきに腰こし
を捻ひねつて行く。……といふのでは、深川見物ふかがはけんぶつも落着おちつく處ところは大
概いがい知しれてゐる。はま鍋なべ、あをやぎの時節じせつでなし、鱒汁どぢやうじるは可
恐そろしい、せい／＼門前もんぜんあたりの蕎麥屋そばやか、境内けいだいの團子屋だんごやで、

雑煮ざくにのぬきで饅頭まんじゅうと正宗まさむねの爛かんであらう。従したがつて、洲崎すさきだの、仲なかちやう
町まちだの、諸入費しよにふひの懸かかる場所ばしよへは、強しひて御案内ごあんない申まをさな
いから、讀者どくしやは安心あんしんをなすつてよい。

さて色氣いろけぬ抜きとなれば、何どうだらう。(そばに置おいてきぬこと
わりや夏羽織なつばおり)と古俳句こはいくにもある。羽織はおりをたゝんでふところへ
突つつ込んで、空からずねの尻端折しりはしよりが、一層いつそう薩張さつぱりでよからうと思おも
つたが、女房にようぼうが産氣さんけづいて産婆さんばのそこへかけ出だすのではない。
けふけふはにちくしんぶんしや日日新聞社しやようの社用しやようで出て來きた。お勤つとめがらに對たいして
も、聊いさゝとか取とつくるはずはあるべからずと、胸むねのひもだけはきちん
としてゐて……暑あついから時とき々／＼だらける。……

「——旦那だんな、どこへおいでなさるんで？ は、ちよつとこたへた

よ。」

と私わたしがいふと、同伴つれは蝙蝠傘かうもりがさのさきで爪皮つまかはを突きながら、

「——そこを眞直まっすぐが福島橋ふくしまばしで、そのさきが、お不動様ふどうさまです

よ、と圓まんタクのがいひましたね。」

今いましがた、永代橋えいたいばしを渡わたつた處ところで、よしと扉とを開あけて、あの、

人ひとと車くるまと梭ひを投なげて織おり違ちがふ、さながら繁昌記はんじやうきの眞中まんなかへこぼ

れて出でて、餘あまりその邊へんのかはりやうに、ぽかんとして立たつた時ときで

あつた。「鮎こちや黒鯛くろだひのぴちくはねる、夜店よみせの立たつ、……魚うをい

市ちの處ところは？」「あの、火ひの見みの下した、黒江町くろえちやう……」と同伴つれが指ゆび

さしをする、その火ひの見みが、下したへ往來わうらいを泳およがせて、すつと開ひらい

て、遠とほくなるやうに見みえるまで、人ひとあしは流ながれて、橋はしたもと袂ひらが廣ひろ

い。

わたしは、實は震災のあと、永代橋を渡つたのは、その日がはじめてだつたのである。二人の風恰好亦如件……で、運轉手が前途を案じてくれたのに無理はない。「いや、たゞ、ぶらつくので。」とばかり申し合はせた如く、麥稈をゆり直して、そこで、左へ佐賀町の方へ入つたのであるが。

さて、かうたゞずむうちにも、ぐわらく、ぐわらとすさまじい音を立てて、貨物車が道を打ちひしいで駆け通る。それあぶない、とよけるあとから、又ぐわらくと鳴つて來る。どしん、づんくづづんと響く。

焼け土がまだそれなりのもあるらしい、道悪を縫つて入ると、

その癖、ひとどほりすくなも少く、バラツク建は軒まばらに、隅を取つて、妙にさみしい。

休業のはり札して、ぴたりと扉をとぎした、何とか銀行の

窓々が、観念の眼をふさいだやうに、灰色にねむつてゐ

るのを、近所の女房らしいのが、白いエプロンの薄よごれた服

装で、まだ二時半前なのに、青くあせた門柱に寄り添つて、然

も夕暮らしく、曇り空を仰ぐも、ものあはれ。……鷗のかはり

に鳥が飛ばう。町筋を通して透いて見える、流れの水は皆黒い。

……

銀行を横にして、片側は焼け原の正面に、野中の一

軒家の如く、長方形に立つた假普請の洋館が一棟、

軒のきへぶつつけがきの（川かは）の字じが大小おほく見みえた。

夜よるは（川かは）の字じに並ならんだその屋號やがうに、電燈でんとうがきら／＼とかゞ

やくのであらうも知しれない。あからさまにはいはいはないが、これは

私わたしの知しつた 米問屋くわいまいどんやである。——（大小おほく出でたな。）——當た

今うこん三等米さんとうまい、一升いつしやうにつき約四十三錢やくよんじふさんせんの値ねを論ろんずるもの

に、米問屋くわいまいどんやの知己ちぎがあらう筈はずはない。……この御新姐ごしんぞの、

人形町にんぎやうちやうの娘時代むすめじだいを預あづかつた、女學校ぢやがくかうの先せん生せいを通とほして、

ほのかに様子やうすを知しつてゐるので……以前いぜん、私わたしが小ちひさな作さくの中に、

少すこし家造りやづくだけ借しやく用ようした事ことがある。

御存じごぞんの通とほり、佐賀町さがちやう一廓いつくわくは、殆ど軒ほとんのきならび問屋とんやといつ

てもよかつた。構かまへも略ぼく同じやうだと聞きくから、昔むかしをしのぶよす

かに、その時分の家のさまを少しいはう。いま此のバラツク建の
 洋館やうくわんに對して——こゝに見取圖がある。——斷るまでもない
 が、地續ぢつづきだからといつて、吉良邸きちらていのでは決してない。米價べいかはそ
 の頃ころも高値たかねだつたが、敢て夜討あへちを掛ける繪圖面えづめんではないのであ
 るが、町まちに向つて檜ひのきの木戸きど、右みぎに忍しのび返がへしの堀へい、向つて本磨ほんみが
 きの千本格子せんぼんがうしが奥深おくふかく靜しづまつて、間あひたの植込うゑこみの緑みどりの中なかに石いし
 燈籠とうろうに影かげが青あをい。藏庫くらは河岸かしに揃そろつて、荷にの揚下あげおろしは船ふねで直す
 ぐに取引とりひきが濟すむから、店口みせぐちはしもた屋やも同じ事こと、煙草盆たばこぼんに
 ほこりも置おかぬ。……その玄關げんくわんが六疊ろくでふの、右みぎへり縁えんの庭には
 に、物數寄ものずきを見みせて六疊ろくでふと十疊じふでふ、次つぎが八疊はちでふ、續つづいて八疊はちでふ
 が川かはへ張出はりだしの欄干下らんかんしたを、茶船ちやぶねは浩々かうくと漕こぎ、傳馬船てんまは洋や

うく々として浮ぶ。中二階の六疊を中にはさんで、梯子段がわかれて二階が二間、八疊と十疊——ざつとこの間取りで、なかんづくその中二階の青すだれに、紫の總のしつとりした岐阜提灯が淺葱にすくの、湯上りの浴衣がうつる。姿は婀娜でもお妾ではないから、團扇で小間使を指圖するやうな行儀でない。「少し風過ぎる事」と、自分でらふそくに灯を入れる。この面影が、ぬれ色の圓鬚の艶、櫛の照とともに、柳をすべつて、紫陽花の露とともに、流にしたゝらうといふ寸法であつたらしい。……

わたしまち私は町のさまを見るために、この木戸を通過ぎた事がある。前庭の植込には、きり島がほんのりと咲き残つて、折から人

とどほ
通りもなしに、眞日中の忍返しの下に、金魚賣が荷を
おろして、煙草を吹かして休んでゐた。

「それ、來ましたぜ。」

風鈴屋でも通る事か。——振返つた洋館をぐわさく
とゆるるが如く、貨物車が、然も二臺。私をかばはうとした同
伴の方が水溜に踏みこんだ。

「あ、ばしやりとやツつけた。」

萬筋の裾を見て、苦りながら、

「かし文句はいひますもののね、震災の時は、このくらゐな
泥水を、かぶりついて飲みましたよ。」

とく 特に震災の事はいふまい、と約束をしたものの、つい愚痴ぐちも出るのである。

このあたり裏道を掛けて、松村、小松、松賀町——松賀を何も、鶴賀と横なまるには及ばないが、町々の名もふさはしい、小揚連中の住居も揃ひ、それ、問屋向の番頭、手代、もうそれ不心得なのが、松村に小松を圍つて、松賀町で淨瑠璃をうならうといふ、藏と藏とは並んだり、中を白鼠黒ろねずみたはらの俵を背負つてちよろしくしたのが、皆灰になつたか。御鼠しんとうの影一つ、松葉の紋も見當らないで、箱のやうな店頭みせさきに、煙草たばこを賣るのもよぼくのおばあさん。

「變かはりましたなあ。」

「變かはりましたは尤もつともだが……この道みちは行ゆき留どまりぢやあないのかね

。」

「案内あんない者がついてゐます。御串ごじやうだん戯ばかり。……洲崎すさきの土手どてへ

突つき當あたつたつて、一ひとつ船ふねを押おせば上總かづさみ滯をで、長崎ながさき、函館はこだてへ

渡わたり放はうだい題だい。どんな拔ぬけ裏うらでも汐しほが通とほつてゐますから、深川ふかがはに

行ゆき留どまりといふのはありませんや。」

「えらいよ！」

どろくとした河岸かしへ出でた。

「仙臺せんたい堀ぼりだ。」

「だから、それだから、行ゆき留どまりかなぞと外ぐわい聞ぶんの悪わるい事ことをい

ふんです。——そもく、大川おほかはからここへ流ながれ口くちが、下之橋しものはし

で、こゝが即ち油堀……」

「あゝ、然うか。」

「間に中之橋があつて、一つ上に、上之橋を流れるのが仙臺堀川ぢやありませんか。……断つて置きますが、その川筋に松永橋、相生橋、海邊橋と段々に架つてゐます。」

……あゝ、家らしい家が皆取拂はれましたから、見通しに仙臺堀も見えさうです。すぐ向うに、煙だか、雲だか、灰汁のやうな空にたゞ一ヶ處、樹がこんもりと、青々して見えませう——

岩崎公園。大川の方へその出つ端に、お湯屋の煙突が見えませう、何ういたして、あれが、霧もやの深い夜は、人をおびえさせたセメント會社の大煙突だから驚きますな。中洲

……あゝ、家らしい家が皆取拂はれましたから、見通しに仙臺堀も見えさうです。すぐ向うに、煙だか、雲だか、灰汁のやうな空にたゞ一ヶ處、樹がこんもりと、青々して見えませう——

岩崎公園。大川の方へその出つ端に、お湯屋の煙突が見えませう、何ういたして、あれが、霧もやの深い夜は、人をおびえさせたセメント會社の大煙突だから驚きますな。中洲

……あゝ、家らしい家が皆取拂はれましたから、見通しに仙臺堀も見えさうです。すぐ向うに、煙だか、雲だか、灰汁のやうな空にたゞ一ヶ處、樹がこんもりと、青々して見えませう——

岩崎公園。大川の方へその出つ端に、お湯屋の煙突が見えませう、何ういたして、あれが、霧もやの深い夜は、人をおびえさせたセメント會社の大煙突だから驚きますな。中洲

……あゝ、家らしい家が皆取拂はれましたから、見通しに仙臺堀も見えさうです。すぐ向うに、煙だか、雲だか、灰汁のやうな空にたゞ一ヶ處、樹がこんもりと、青々して見えませう——

岩崎公園。大川の方へその出つ端に、お湯屋の煙突が見えませう、何ういたして、あれが、霧もやの深い夜は、人をおびえさせたセメント會社の大煙突だから驚きますな。中洲

と、箱崎はこぎきを向うむかに見て、隅田川すみだがはも漫々まんく渺々べうくたる處ところだから、

あなた驚おどろいてはいけません。」

「驚おどろきません。わかつたよ。」

「いや念ねんのために——はゝゝ。も一つ上ひとが萬年橋まんねんばし、即ち小名木

川が、千筋萬筋ちすぢまんすぢの鰻うなぎが勢せい揃ぞろをしたやうながに流ながれてゐます。あの

利根川とねがはづし圖志なかの中に、……えゝと——安政二年あんせい乙卯にねんきのとう十月じふぐわつ、

江戸えどには地震ぢしんの騒さわぎありて心静こゝちづかならず、訪來とひくる人も稀まれなれば、

なか／＼いとまに暇いとまある心地こゝちして云々しか／＼と……吾わが本所ほんじよの崩くづれたる

家いへうしろを後みに見て、深川ふかがは高橋たかばしの東ひがし、海邊うみべ大工町だいくちやうなるサイカチと

いふ處ところより小名木川をなぎがはに舟ふねうけて……」

「また、地震ぢしんかい。」

「あゝ、黙り黙り。——あの高橋をで出る汽船はたいへん大變なこんざつ混雜ですとき。——この四五年浦安の釣がさかつて、沙魚がわいた、鰈が入つたと、乗出するのが、押合、へし合。朝の一番なんぞは、汽船の屋根まで、眞黒に人で埋まつて、川筋を次第に下ると、下の大富橋、新高橋には、欄干外から、足を宙に、水の上へぶら下つて待つてゐて、それ、尋常ぢや乗切れないもんですから、そのまんま……そつとでせうと思ひますがね、——それとも下敷は潰れても構はない、どかりとだか何うですか、汽船の屋根へ、頭をまたいで、肩を踏んで落ちて來ますツて。……こ奴が踏みはづして川へはまると、（浦安へ行かう、浦安へ行かう）と鳴きます。」

「串戲ぢやあない。」

「お船藏ふなぐらがつい近くつて、安宅丸あたかまるの古跡こせきですからな。いや、然さういへば、遠目鏡とほめがねを持つた氣きで……あれ、ご覽ろうじろ——と、河童かつぼの兒こが回向院ゑかうゐんの墓原はかばらで惡戲いたづらをしてゐます。」

「これ、芥川あくたがはさんに聞きこえるよ。」

私わたしは眞面目まじめにたしなめた。

「口ぢやあ兩國りやうこくまで飛とんだやうだが、向むかうへ何どうして渡わたるのさ、橋はしといふものがないぢやあないか。」

「ありません。」

と、きつぱりとしたもので、蝙蝠傘かうもりがさで、踞しゃがみこ込んで、町内持ちやうないもちの分ぶんだから、まだ、架か

からないでゐるんでせうな。尤もかうどろ／＼に埋まつては、油あ
 堀ぶらぼりとはいへませんや、鬢びんつけぼり付堀も、黒鬢くろびんつけです。」

「塗ぬりたくはありませんなかな。」

「わたしはもう歸かへります。」

と、麥むぎ稈わらをぬいで風かぜを入れた、頭あたまの禿はげを憤いきどほる。

「いま見棄みすてられて成なるものか、待まちたまへ、あやまるよ。しか

しね、仙臺せんだい堀ぼりにしろ、こゝにしろ、残のこらず、川かはといふ名ながつい

てゐるのに、何なにしろひどくなつたね。大分だいぶん以前いぜんには以前いぜんだが……

やつぱり今いま頃ごろの時じ候こうに此この川筋かはすぢをぶらついた事ことがある。八はち

幡ん様さまの裏うらの渡わたし場ばへ出でようと思おもつて、見當けんたうを取とり違ちがへて、あち

らこちら抜ぬけ裏うらを通とほるうちに、ざんざ降りぶりに降ふつて來きた、ところ

がね、格子さきへ立つて、雨宿りをして、出窓から、紫ぎれの
てんじんに聲をかけられようといふ柄ぢやあなし……」

「勿論。」

「たゝつたな——裏川岸の土藏の腰にくつつ付いて、しよんぼりと
立つたつけ。晩方ぢやあつたが、あたりがもうくとして、
むかぎし、ぼつと暗い。折から一杯の上汐さ。……近い處に、
柳の枝はじやぶくと浸つてゐながら、渡し船は影もない。何も、
あぶらぼり、油堀だつて、そこにづらりと並んだ藏が——中には破壁に
くさは、草の生えたのも交つて——油藏とも限るまいが、妙に油
壺、油瓶でも積んであるやうで、一倍陰氣で、……穴か
ら燈心が出さうな氣がする。手長蝦だか、足長蟲だか、び

ちやくくと川面ではねたと思ふと、岸へすれくの濁つた中から、尖つた、黒い面をヌイと出した……」

小さな聲で、

「河、河、河童ですか。」

「はげてる癖に、いやに臆病だね——何、泥龜だつたがね、のさくと岸へ上つて來ると、雨と一所に、どつと足もとが川になつたから、泳ぐ形で獨りでにげたつけ。夢のやうだ。このびんつけに日が當つちやあ船蟲もはへまいよ。——おんなじ川に行當つても大した違ひだ。」

「眞個ですな、いまお話のその邊らしい。……私の友だちは泥龜のお化どころか、紺蛇目傘をさした女郎の幽靈に逢ひま

した。……おなじく雨の夜で、水だか路だか分らなく成りましてね。手をひかれたさうですが、よく川へ陥らないで、橋へ出て助かりましたよ。」

「それが、自分だといふのだらう。……幽霊でもいゝ、橋へ連れ出してくれないか。」

「——娑婆へ引返す事にいたしませうかね。」

もう一度、念入りに川端へ突き當つて、やがて出たのが黒龜橋。——こゝは阪地で自慢する（……四ツ橋を四つわたり

けり）の趣があるのであるが、講釋と芝居で、いづれも御存じの閻魔堂橋から、娑婆へ引返すのが三途に迷つた事になつて——面白……いや、面白くない。

が、無事であつた。

——わたしは、蝙蝠傘を、階段に預けて、——如何に梅雨時とはいへ……本來は小舟でぬれても、雨のなゝめな繪に成べき土地柄に對して、かう番ごと、縺子張を提出したのでは、をかしく蜴蠃傘の術でも使ひさうで眞に氣になる、以下この小道具を節略する。——時に扇子使ひの手を留めて、默拜した、常光院の閻王は、震災後、本山長谷寺からの入座だと承はつた。忿怒の面相、しかし威あつて猛からず、大閻魔と申すより、口をくわつと、唐辛子の利いた關羽に肖てゐる。従つて古色蒼然たる脇立の青鬼赤鬼も、蛇矛、長槍、張飛、趙雲の概のない事はない。いつか四

つやだうとびら
 谷の堂の扉をのぞいて、眞暗まつくらな中なかに閻王えんわうの眼まなこの輝こくともにも、
 ほんじよ
 本所の足洗屋敷あしあらひやしきを思おもはせる、天井てんじやうから奪衣だつえの大婆おほばばの
 くみちが
 組違くみちがへた脚あしと、眞俯まうつむ向けにに睨にらんだ逆白さかしらが髪がに恐怖おそれをなした、陰い
 んさん
 慘しゆらたる修羅しゆらの孤屋こをくに比くらべると、こゝは却かへつて、唐土たうど桃園たうゑんの風かぜ
 が吹ふく。まして、大王だいわうの膝ひざがくれに、婆ばは遣手やりての木乃伊みいらの如ごとく
 ひそんで、あまつさへ脇立わきだちの座ざの正しやう面めんに、赫耀かくえうとして觀く
 わんぜおんた
 世よ晉しん立たたせ給たまふ。小兒衆こどもしうも、娘むすめたちも、心こゝろやすく賽さいしてよか
 らう。但たゞし浮氣うはきだつたり、おいたをすると、それはく本當ほんたうに
 こは
 可恐こはいのである。

をぢ
 小父をぢさんたちは、おとなしいし、第一だいいち品行ひんかうが方ほう正せいだから
 い
 ……言いつた如ごとく無事ぶじであつた。……はいゝとして、隣地りんち心行しんぎやう寺じ

の假門かりもんにかゝると、電車でんしゃの行違ゆきちがふすきを、同伴つれが、をかしたことをいふ。

「えゝ、一寸懺悔ちよつとざんげを。……」

「何なんだい、いま時分じぶん。」

「ですが、閻魔あちらさま様の前まへでは、氣きが怯ひけたものですから。——實じつは此寺こゝの墓地ぼちに、洲崎すさきの女郎やつが埋うまつてるんです。へ、へ、へ。なが、つきとほ、かうがい、うすげしやう、薄化粧うすげしやうだつた時分じぶんの、えゝ、何なんにもかに長い突通ながしの筈はずで、元服げんぷくをしたんですがね——富川とみかはちやも、未ひつじの刻こくの傾かたむきて、——

町ううまれの深川ふかがはツ娘こだからでもありませんまいが、年ねんのあるうちから、流れ出ながだして、途つひに泡沫うたかたの儂はかなさです。人ひとづてに聞きいたばかりですけれども、野のに、山やまに、雨あめとなり、露つゆとなり、雪ゆきや、氷こほり

で、もとの水へ返つた果は、妓夫上りと世帯を持つて、土手で、
 おでん屋やをしてゐたのが、氣が變へんになつてなくなつたといひます
 — 上州じやうしう安中あんなかで旅藝たびげい者しやをしてゐた時とき、親知おやしらずでもらつ
をんなた女の子こが方便ほうべんぢやありませんか、もう妙齡としごろで……抱かへぢや
 ありませんが、仲なかで藝げい者しやをしてゐて、何どうにかそれが見送みおくつ
 たんです。……心行しんぎ寺やうじと確たいひましたつけ。おまゐりをして下くだ
 さいなど、何なにかの時ときに、不思議ふしぎにめぐり合あつて、その養女やうぢよから
 いはれたんですが、ついそれなりに不沙汰ぶさたでゐますうちに、あの
 震しんざい災さいで……養女やうぢよの方も、まるきし行衛ゆくへが分わかりません。いづれ
まよ迷まよつてゐると思おもひますとね、閻魔堂えんまだうで、羽目はめの影かげがちらりく
 と青鬼あをおに赤鬼あかおにのまはりへうつるのが、何なんですか、ひよろくと

しろをんな
白い女が。……」

いやな事をいふ。

「……又地獄の繪といふと、意固地に女が裸體ですから、氣に成りましたよ、ははは。……電車通りへ突つ立つて、こんなお話をしたんぢあ、あはれも、不氣味も通り越して、お不動様の縁日にカンカンカンカン——と小屋掛で鉦をたたくのも同然ですがね。」

お参りをするやうに、私がいふと、

「何だか陰氣に成りました。こんな時、むかし一つ夜具を被つた女の墓へ行くと、かぜを引きさうに思ひますから。」

ぞつとする、といふのである。なぜか、私も濕つぽく歩行き出

した。

「その癖くせをかしいぢやありませんか。名所圖繪めいしよづゑなぞ見みます度たびに、妙めうにあの寺てらが氣きに成なりますから、知しつてゐますが、寶物ほうもつに（文ぶん幅んぶく茶釜ちやがま）——一名いちめい（泣なき茶釜ちやがま）ありは何どうです。」

といつて、涙なみだだか汗あせだか、帽ぼうし子とを取とつて顔かほをふいた。頭あたまの皿さらがはげてゐる。……思おもはず私わたしが顔かほを見みると、同つれ伴れも苦にが笑わらひをしたのである。

「あ、あぶない。」

笑わらひごと
事ことではない。——工こう事じ中ちゆう土つち瓦かはらのもり上あがつた海邊うみべ

橋しを、小こ山やまの如ごとく乗のり來くる電でん車しやは、なだれを急きふに、胸どう腹ばらを

欄干らんかんに、殆ほとんど横よこ倒だふしに傾かたむいて、橋はし詰づめの右みぎに立たつた私わたしたちの

横よこ面つらをはね飛とばしさうに、ぐわんと行く時ゆきとき、運轉うんでんだい臺上じやうの人ひと
 の體たいも傾かたむく滯みをの如ごとく黒くろく曲まがつた。

二人ふたりは同時どうじに、川岸かしへドンと怪けし飛とんだ。曲まがり角かどに（危き險けんに
 つき注意ちうい）と札ふだが建たつてゐる。

「こつちが間拔まぬけなんです。——番ばんごとこれぢや案内者あんないしや申まをし譯わけ
 があります。」

片側かたがはのまばら垣がき、一重ひとへに、ごしやくと立亂たちみだれ、或あるひは缺かけ、
 或あるひは傾かたむく、或あるひは崩くづれた石塔せきたふの、横鬢よこびんと思おもふ處ところへ、胡粉ごふんで白しろく、
 さま／＼な符號ふがうがつけてある。卵塔場らんたふばの移轉いってんの準備じゆんびらしい。
 ……同伴つれのなじみの墓はかも、參まゐつて見みれば、雜ざつとこの體ていであらうと
 思おもふと、生々なまくと白しろい三角さんかくを額ひたひにつけて、鼠ねずみ色いろの雲くもの影かげに、

もうろうと立つてゐさうでならぬ。

——時間の都合で、今日はこちらへは御不沙汰らしい。が、こ

の川を向うへ渡つて、大な材木堀を一つ越せば、淨心寺——

靈巖寺の巨刹名山がある。いまは東に岩崎公園の森の

ほかに、樹の影もないが、西は兩寺の下寺つゞきに、凡そ墓

ばかりの野である。その夥多しい石塔を、一つ一つうなづく

石の如く従へて、のほり、のほりと、巨佛、濡佛が錫

杖に肩をもたせ、蓮の笠にうつ向き、圓光に仰いで、尾花

の中に、鶏頭の上に、はた袈裟に蔦かづらを掛けて、鉢に月

影の粥を受け、掌に霧を結んで、寂然として起ち、また跌

坐ざなされた。

櫻さくら、山吹やまぶき、寺内じないの蓮はちすの華はなの頃ころも知らしない。そこで蛙かはづを聞きき、

時とき鳥とりを待まつ度ど胸きょうもなない。暗夜やみよは可お恐そろし、月夜つきよは物ものすごい。

……知しつてゐるのは、秋あきまた冬ふゆのはじめだが、二度にど三度さんど、私わたしの通とほ

つた數かずよりも、さつとむら雨さめの數かず多おほく、雲くもは人ひとよりも繁しげく往來ゆきき

した。尾花をばなは斜ななめに戰そよぎ、木この葉ははかさなつて落おちた。その尾花をばな、

嫁菜よめな、水引草みづひきさう、雁來紅ばげいとうをそのまゝ、一ひと結むすびして、處ところ々々

にその木この葉はを屋根やねに葺ふいた店小屋みせごやに、翁おきなも、媪うばも、ふと見みれば

わかむすめ、若い娘わかひなも、あちこちに線香せんかうを賣うつてゐた。狐きつねの豆腐屋とうふや、狸たぬきの酒

屋かや、獺はうその鰯いわし賣こも、薄日うすびにその中なかを通とほつたのである。

……思おもへばそれも可なつ懐かしい……

見てすぎつ。いまの墓地の様子で考へると、ぬれ佛の彌陀、地藏菩薩が、大きな笠に胡粉で同行二人とかいて、足のない蟹の如く、おびたゞしい石塔をいざなひつゝ、あの靈巖寺の、三途離苦生安養——一切衆生成正覺——大鈞鐘を、灯さぬ提灯の道しるべに、そことも分かず、さまよはせ給ふのであらうも存ぜぬ。

「やあ、極樂。おいらんは成佛しました。」

だしぬけに。……

「納屋に立掛けた、四分板をご覽下さい、極……」といひ掛けて、
「何だ、極選か——松割だ。……變な事を考へてゐたもので

すからうつかり見違へました。先達またへこみ。……」
 次々に——特選、精選、改良、別改、また稀……
 がある。

「こんな婦なら、きみはさぞ喜ぶだらう。」

さもあらばあれ、極樂の蓮の香よりたのもしい、松檜の香の
 ぷんとする河岸の木小屋に氣丈夫に成つた、と思ふと、つい目
 の前の、軒先に、眞つかな旗がさつとなびく。

わたし
 私はぎよつとした。

「はゝゝ、櫂の大又を見せて、船の梶に成る事、檜の大割
 を見せて、蒲鉾屋のまな板はこれで出来ますなど、御傳授を
 申しても一向感心をなさらなかつたが、如何です、この旗に

對して説明がなかつた日には、海邊橋まで逃げ出すでせう。」

案内者は大得意で、

「さ、さ、私について、構はず、ずつとお進み下さい。赤い旗に

は、白抜きで荷役中としてあります——何と御見物、河岸か

ら材木の上下ろしをする長ものを運ぶんですから往來のものに

注意をします。——出ました、それ、彼處へ、それ、向うへ——」

うしろへも。……五流六流、ひらくくと翻ると、河岸に、

ひしくとつけた船から、印絆纏の威勢の好いのが、割板

丸角なんぞ引かひついで、づしく段々を渡つて通る。……時

間だ見え、揃つて揚荷で、それが歩板を踏み越すにつれ、

おもみを匆ね返して——川筋を横にずつと見通しの船ばたは、

汐しほの寄よるが如ごとく、ゆらくと皆みなゆれた。……深川ふかがはの水みづは、はじめて動うごいた。……人ひとが波なみを立てたやうに。――

「は、成程なるほど、は。」

案内者あんないしやは惜げし氣げもなく頭あたまのはげを見みせて、交番かうばんでおじぎをしてゐる。叱しかられたのではない。――橋はしを向むかうへ渡わたらずに、冬木ふゆきの道みちを聞きいたのであつた。

「おなじやうでも、冬木ふゆきだから尋ねようございますよ。これが、洲崎すさきの辨天べんてん様さまだどちよつと聞きき悪い……てつた勘定かんぢやうで。……お職しよく掌しやうがら、至極しごく眞面目まじめですからな。」

振返ふりかへると、交番かうばんの前まへから、肩かたを張はつて、まつ直すぐに指ゆびさしをして下くだすつた。細ほそい曲まがり角かどに迷まよつたのである。橋はしから後あと戻もどり

をした私^{わたし}たちは、それから二度^{にど}まで道^{みち}を聞^きいた。

この横^{よこ}を——まつすぐにと、教^{をそ}はつて入^{はひ}つた徑^{こみち}は、露^ろ地^ぢとも、

廂^{ひあはひ}合^あともつかず、横^{よこ}縦^{たて}畝^{たうね}り込^こみになつて、二人^{ふたり}並^{なら}んでは幅^はつ

たい。しかも搜^{さぐ}り足^{あし}をするほど、草^{くさ}が伸^のびて、小^{ちひ}さな夏^{なつ}野^{のおもむき}の趣^が

ある。——棄^{はぶ}り放^{ばな}しの空^{あき}地^ちかと思^{おも}へば、竹^{たけ}の木^き戸^どがあつたり、江^え

一^{いち}格^{がう}子^しが見^みえたり、半^{はん}開^{びら}きの明^{あかり}窓^{まど}が葉^は末^{すえ}をのぞいて、小^{ちひ}

さな姿^{すがた}見^みに葱^{しのぶ}が映^{うつ}る。——彼^{かしこ}處^こに朝^{あさ}顔^{がほ}の簪^{かんざし}さした結^{ゆひ}綿^{わた}の緋^ひ

鹿^{かのこ}子^こが、などと贅^{ぜい}澤^{たく}をいつては不^い可^けない。居^あれば、誰^{たれ}が通^{とほ}さう

?……妙^{めう}に、一^{ひと}つ家^{いへ}の構^{かま}へうちを抜^ぬき足^{あし}で去^ゆく氣^きがした。しをら

しいのは、あちこちに、月^{つき}見^み草^{くさう}のはらくくと、露^{つゆ}が風^{かぜ}を待^{ます}つ姿^{がた}

であつた。

こゝを通^{とほりぬ}拔^ぬけつゝ見た^み一軒^{いつけん}の低い^{ひく}屋根^{やね}は、一^{ひと}叢^{むらたか}高く茂^{しげ}つた月見草^{つきみさう}に蔽^{おほ}はれたが、やゝ遠^{とほ}ざかつて振返^{ふりかへ}ると、その一^{ひとむ}叢^{むらたか}の葉^はの雲^{くも}で、薄^{うすきいろ}黄色^{まる}な圓^{つき}い月^{つき}を抱^だくやうに見^みえた。

霧^{もや}が、ぼつとして、折^{をり}から何^{なん}となく雲^{くも}低^{ひく}く、徑^{こみち}も一段^{いちだん}窪^{くぼ}んで四^し五^ご十^じ坪^{つちば}、——はじめて見^みた——蘆^{あし}が青^{あを}々と亂^{みだ}れて生^はえて、徑^{こみち}はその端^{はし}を縫^ぬつてゐる。雨^{あめ}のなごりか、棄^すて水^{みづ}か、蘆^{あし}の根^ねはびしよびしよと濡^ぬれて動^{うご}いて、野^の茨^{いばら}の花^{はな}が白^{しろ}く亂^{みだ}れたやうである。

時^{とき}しも、一^{ひと}通り、大^{おほ}粒^{つぶ}なのが降^ふつて來^きた。蘆^{あし}を打^うつて、ぱら〜と音^{おと}立てて。

「ありがたい、かきつばたも、あやめもこゝには咲^さきます。何^{なに}、根^ねも葉^はもなくつても一^{いち}輪^{りん}ぐらゐきつと咲^さきます。案^{あん}内^{ない}者^{しや}みや

うがに、私が咲かせないでは置きません。露草の青いのも露つぽくこゝに咲きます。嫁菜の秋日和も見られますよ。——それに、何ですな……意氣だか、結構だか、何しろ別荘、寮のあとで、これは庭の池らしいうございますね。あの、蘆の根の處に、ふるがさ古笠のつぶれたやうな青苔の生えた……あれは石燈籠なんですよ。」

よく見ると、菜屑も亂れた。成程燈籠の笠らしいのが、忽ち、三ツ四ツに裂けて蝦蟇に成つたか、と動き出したのは、蘆を分けて、ばさくと、二三羽、鶏の潜りながら啄むのである。鮎や、泥鰌の生残つたのではない、蚯蚓……と思ふにも、何となく棄て難い風情であつた。

しばらく視^{なが}めたが、牡^{をんどり}鶏^ががパツと翼^{つばさ}を拂^{はた}いて、雨^{あま}脚^{あし}がやゝ
 繁^{しげ}く成^なつたから、歩^{ある}行^だき出^だすと、蘆^{あし}の根^ねを次^{しだい}第^だ高^かに、葉^はがくれ
 に、平^{ひら}屋^やのすぐ小^こ座^ざ敷^{しき}らしい丸^{まる}窓^{まど}がある。路^{みち}が畝^{うね}つて、すぐの
 そのえんそと
 其^{その}縁^{えん}外^{がい}をちか／＼と通^{とほ}ると、青^{あを} 簾^{すだれ}が二^に枚^{まい}……捲^まいたので
 はなかつた、軒^{のき}から半^{なか}垂^たれた其^{その}細^{ほそ}いぬれ縁^{えん}に、なよ／＼として、
 きり／＼としまつた浴^ゆ衣^{かた}のすそが見^みえた。白^{しろ}地^ぢに、藍^{あゐ}の琴^{こと}柱^ぢ霞^{がすみ}が
 ちら／＼とする間^まもなく、不^ふ意^いに衝^つと出^でた私^{わたし}たちから隠^{かく}れるやう
 に、朱^と鷺^きの伊^{だて}達^ま卷^まですつと立^たつ時^{とき}、はらりと捌^{さば}いた棲^つ淺^{あさ}く、柘^ざ榴^{くろ}
 の花^{はな}か、と思^{おも}ふのが散^ちつて、素^す足^{あし}が夕^ゆ顔^{がほ}のやうに消^きえた。同^{どう}時^じ
 に、黒^{くろ}い淡^{うす}い影^{かげ}が、すだれ越^こにさつと映^さした、黒^{くろ}髪^{かみ}が長^{なが}く流^{なが}れ
 たのである。

洗あらひがみ髪かみを干かわかしてなどゐたらしい。……そのすだれを漏もれた

のは、縁えんに坐すわつたのか、腰こしを掛かけたのか、心こころづく暇ひまもなかつた。

「……ざくろの花はな、そ、そんな。あの、ちらくくと棲つまに紅あかかつた

のは螢ほたるの首くびです。又またぼつと青あをく光ひかるやうに肌はだに透すき通とほつたではあ

りませんか。……螢ほたるを染そめた友いうぜん染せんですよ。もうあのくらゐ色いろが

白しろいと、影かげばかり、螢ほたるの羽はねの黒くろいのなんぎ、目めが眩くらんで見みえやし

ません。すごい、何どうもすごい。……特とく選せん、精せい選せん、別べつ改かい、

改かい良りやう、稀まれ——です。木場きばちう中ちゆうを背しよ負ふつて立たて。極ごく選せん、極ごく樂らく、

有あり難がたい。いや魔界まかいです、すごい。」

といふ、案内あんない者の横面よこつらへ、出崎でさきの巖いはをきざんだやうな、徑みち

へ出張でばつた石段いしだんから、馬うまの顔かほがヌツと出でた、大おほきな洋犬かめだ。長ち

やうやくよくれふす
 啄能獵——パンくと厚皮な鼻が、鼻へぶつかつたから、

「ワツ。」

といった。——石垣から蟻が出たと思つたさうである。

犬嫌ひな事に掛けては、殆ど病的で、一つはそれがため

に連立つてもらつた、浪人の劍客がその狼狽へかただから、

膽を冷やしてにげた。

またゐた——再び吃驚したのは三角をさかさな顔が、正

面に蟠踞したのである。こま狗の焼けたのらしい。が、角の

折れた牛、鼻の碎けた猪、はたスフィックスの如き異形な石が、

他に壘々としてうづたかい。

早く本堂わきの裏門で、つくろつた石の段々の上の白い

丘は、堀を三方に取とりまはした冬木の辨財天の境内であつた。

「お顔を、ご覽に成りますか。」

「いや何ういたして。……」

「こゝで拜をして參ります。」

と、同伴もいつた。

手はよく淨めたけれども、刎を上げて、よぢれた裾は、これし

かしながら天女に面すべき風體ではない。それに、蠟燭を取

次いだのが、堂を守る人だと、ほかに言があつたらう。居合はせ

たのは、近所から一寸留守番に頼まれたといつた前垂れ掛の

年配者で、「お顔を。」——これには遠慮すべきが當然の

こといまおもふ。況して、バラツクの假住居の縁に、端近だつた婦人さへ、山の手から蘆を分けた不意の侵入者に、顔を見せなかつた即時であつた。

潮時と思はれる。池の水はやゝ増したやうだが、まだ材木を波立たせるほどではない。場所によると、町が野になつた處もあるのに、覺えて一面に蘆が茂つた池の縁は、右手にその蘆の丈ばかりの小家が十ウばかり數を並べて、蘆で組んだ簾も疎に、揃つて野草も生えぬ露出の背戸である。しかし、どの家も、どの家も、裏手、水口、勝手元、皆草花のたしなみがある、この盆裁も置き交せて。……失禮ながら、缺摺鉢の松葉好みの牡丹、蜜柑箱のコスモスもありさうだが、やがて夏も半ば、秋

を掛けて、手桶、盥、俎、柄杓の柄にも朝顔の蔓など掛けて、
 いへく、うしろすがた
 家々の後姿は、花野の帯を白露に織るであらう。

いろ
 色なき家にも、草花の姿は、ひとつく女である。軒ごとに、

かほよむすめ
 妍き娘がありさうで、皆優しい。

よこ
 横のこの家ならびを正面に、鍵の手になつた、工場ら

しい一棟がある。——その細い切れめに、小さな木の橋を渡し

たやうに見て取つたのは、折から小雨して、四邊に靄の掛つた

めで、同伴の注意を待つまでもない。ずっと見通しの、油堀

から入堀の水に、横に渡した小橋で、それと丁字形に、眞向

うへ、雨を柳の絲状に受けて、縦に弓形に反つたのは、即ち、

もとの渡船場に替へた、八幡宮、不動堂へ參る橋であつた。

「あなたが、泥龜すつぽんに遁にげたのは——然さうすると、あの邊へんです
ね。」

「さあ、あの渡船場わたしに迷まよつたのだから、よくは分わからないが、彼あの邊へんだらうね。何なにしろ、もつと家藏いへくらが立たて込んで居あんだよ。」
「従したがつても變へんですが、……友ともだちが、女ぢよらう郎らうの幽靈いうれいに手てを曳ひか
れたのは、工場こうばの向むかひうら裏らあたりなに成なるかも知しれません。——然さ
う言いへば、いま見みた、……特選とくせん、稀まれなり、ふつと消きえたやうで、
何なんだか怪あやしうございますよ。」

「御堂前おだうまへで、何なにをいふんだ。」

「こりや何どうも……景色けしきに見惚みとれて、また鳥居とりゐぎ際はに立たつてゐま
した。——あゝ八幡はちまんさま様さまの大銀杏おほいてふが、遠見とほみの橋はしのむかうに、對つゐ

に青々として手に取るやうです。涼しさうにしとくと濡れて
 ゐます。……震災に焼けたんですが、神田の明神様のもも、
 何所でも、銀杏は偉うございますな。しかし苦勞をしましたね、
 彼所へ行つたら、敬意を表して挨拶をませうよ。石碑がない
 と、くツつけて夫婦にして見たいんですが、あの眞中の横
 綱が邪魔ですな。」

「馬鹿な事を——相撲鬣貞が聞くと撲るからおよし。おや、馬が
 通る。……」

橋の上を、ぬほりとして大きな馬が、大八車を曳きながら。
 ——遠くで且音がしないから、橋を行くのが一本の角木に乗つ
 て、宛如、空を乗るやうである。

ハツと思ふほど、馬の腹とすれぐに、鞍から下つた娘が一人。
 ……白地の浴衣に、友禪の帯で、島田らしいのが、傘もささず、
 ひらりと顯はれると、馬は隠れた、——何、池のへりの何の家か、
 その裏口から出たのが、丁度、遠くで馬が橋を踏むトタンに、
 その姿を重ねたのである。

雨を面白さうに、中の暗い工場の裏手の廂下を、池につ
 いて、白地をひらくと蝶の袖で傳つて行く。……その風情に和
 らげられて、工場の隅に、眞赤に燃ゆる火が、凌霄花の影を
 水に投げた。

娘がうしろ向きになつて、やがて、工場について曲る岸から—
 —その奥にも堀が續いた——高瀬船の古いのが、斜に正面

を切つて、舳を蝦蟆の如く、ゆらくくと漕ぎ來り、半ば池の隅へ
 顯はれると、後姿のまゝで、ポンと飛んで、娘は蓮葉に、輕
 く船の上へ。

そして、艫を押す船頭を見て振向いた。父さんに甘えたか、
 小父さんを迎へたか、兄哥にからかつたか、それは知らない。振
 向いて、うつくしく水の上で莞爾した唇は、雲に薄暗い池の
 中に、常夏が一輪咲いたのである。

永喜橋——町内持ちの、いましがたの小橋と、渡船場に架け
 た橋と、丁字形になる處に、しばらくして私たちは又たゝずん
 で、冬木の池の方を振り返つたが、こちらからは、よくは見通せ
 ない。高瀬の蝦蟆の背に娘の飛び乗つたあたりは、蘆のない、たゞ

稗時ひえまきの盤はちである。

いふまでもなく、辨財天べんざいてんの境内けいだいから、こゝへ來るには、一

とまち

町、てかくとした床屋とこやにまじつて、八百屋やほや、荒物あらものの店みせが賑

ひ、二階造りに長唄ながうたの三味線みやげせんの聞える中なかを通つた。が急きふに

一面いちめんの焼野原やけのはらが左ひだりに開けて、永代えいたいあたりまで打ぶつ通とほしかと

思おもはれた處ところがある。電柱でんちゆうとラヂオの竹たけが、矢來やらいの如ごとく、きらり

と野末のずゑを仕切しきるのみ。「茫漠ぼうぼくたるものですな。」案内者あんないしやにも

どこだか舊もとの見當けんたうがつかぬ。いづれか大工場だいこうぢやうの跡あとだらうで通

つて來たが、何なに、不思議ふしぎはない、嘗かつて満々まんくと鱗うろこ浪なみを湛たへた

養魚場やうぎよぢやうで、業火ごふくわは水みづを燒やき、魚さかなを煙けぶりにしたのである。原はらの

波間なみまを出でつ入いりつ。渚なぎさに飛々とびくとまや、苦屋くまの状さま、磯家いそや淺間あさまな垣かき廂ひさしの、

あたら 新あらたしい佛壇ぶつだんの覗のぞかれるものあり、古蚊帳ふるがやを釣つり放はなしたのに毛脛けずね
 が透すけば、水口みづぐちを蔽おほひ果はてぬ管くだすだれ簾したの下したに、柄杓ひしやく取とる手ての
 しろ 白しろさも露呈あらはだつたが、まばら垣がきあれば、小窓こまどあれば、縁えんが見みえれ
 ば……また然さなければ、板切いたぎれに柵たなを組くみ、葎よしず簀たを立てて、いひ
 合あはせたやうに朝顔あさがほの蔓つるを這ははせ、あづま菊ぎく、おしろいの花はな、
 おいらん草さうすゝ、薄刈すゝ萱きるはありのまゝに、桔梗ききやうも萩はぎも植うゑて、
 なか 中なかには、大おほきな焼木杭やけぼつくひの空うつろ虚うつろを苔蒸こけむす丸木船まるきぶねの如ごとく、また貝か
 ひがら 殻ひがらなりに水みづを汲くんで、水草みづくさの花はな白しろく、ちよろちよると噴ふき水あげ
 を仕掛しかけて、思おもはず行かうじん人あしの足あしを留とめるのがあつた。
 みだう 御堂みだうの裏うら、また鳥居とりゐまへ前まへから、ずつと、恚かうまで、草花くさばなに氣き
 そろ 的そろつた處ところは、他ほかに一寸ちよつと見當みあたらない。天女てんによの袖そでの影かげが日ひにも

月にも映つて、優しい露がしたゝるのであらう。

——いま、改めて遙拜した。——家毎に親しみの意を表しつゝ、更に思へば、むかしの泥龜の化異よりも、船に飛んだ娘の姿が、もう夢のやうに思はれる。……池のかくれたのにつけても。

なんど、ものゝしく言ふほどの事はない。私は、水畔の左だりづま褭が、屋根船へ這込むのが見苦しいの、頭から潜るのが無意氣だのと——落ちさへしなれば可い——そんな事を論ずる江戸がりでは斷じてない。が、おはぐる蜻蛉が濡へ止つたと同じ様に、冬木の娘の早術を軽々に見過されるのが聊かもの足りない。漕ぎつゝある船には、岸から手を掛けるのさへ、實は一種の

冒険ぼうけんである。

いま、兵庫岡本の谷崎潤一郎さんが、横濱から通つて、某活動寫眞の世話せわをされた事がある。場所を深川ふかがはに選んだのに誘はれて、其の女優……否、撮影を見に出掛けた。年の暮で、北風の寒い日だった。八幡様の門前の一と寸したカフエーで落合つて……いまでも覚えてゐる、谷崎さんたにざきは、かきのフライを、おかはりつき、俗にこみで誂へた。私は腹を痛めて居た。何、名物の馬鹿貝、蛤なら、鍋で退治て、相拮抗する勇氣はあつたが、西洋料理の獻立に、そんなものは見當らない。……壘ごと熱燗で引掛けて、時間が來たから、

のこり約やくいちがふはん一合半をぐわいたう外套のポケツト衣兜しのに忍しのばせた。洋杖ステツキを小脇わきに、オーバー外套えりの襟えりをきりりと立たてたのと、連立つれだつて、門前もんぜん通りをもんぜんどほ裏うらへ——越えつちうじま中島うねを畝ながつて流ながるゝ大島おほしまがはずち川筋はうらいばしの蓬菜橋ほうらいばしにかゝると、汐時しほどきを見計みはからつたのだから、水みづは七分しちぶき來た。渡わたつた橋はしづ詰めに、寫真しゃしんの一行いつかうの船ふねが三艘さんそう、石垣いしがきについてゐる。久ひさしぶりだつたから、私わたしは川筋かはすぢを兩方りやうほうにながめて、——あゝ、おもひ起おこす、さばけた風葉ふうえふ、おとなしい春葉しゆんえふなどが、血氣けつきさかんに、霜しもを浴あび、こがらしを衝ついて、夜よふけては蘆あしの小窓こまどにもの思おもふ女をんなに、月影つきかげすぐく見送みおくられ、朝あさ歸がへり遅おそうしては、苦とまで蟹かにを食くふ阿媽おつかあになぶられながら、川口かはぐちまでを幾いくかへり、小こ船ぶねで漕こがしたものだつけ。彼處あそこに、平清ひらせいの裏うらの松まつが見みえる。

：一畝りした處が橋詰の加賀家だらう。……やがて渺々たる蘆原の土手になる。……

船で手を舉げたのに心著いた。——谷崎さんはもう乗つて

ゐた。なぞへに下りて石垣へ立つと、私の丈ぐらゐな下に、船

の小べりが横づけになつて、中流の方に二艘、谷崎さんはそ

の眞中に寒風に吹かれながら颯爽として立つてゐた。申し

譯をするのではない、私は敢て友だちを差置いて女優の乗つた

のを選びはしないが、判官飛なぞ思ひも寄らぬ事、その近い

のに乗らうとすると、些と足がとゞき兼ねる。……「おつかまん

なせえ。」赤ら顔の船頭が逞ましい肩をむずと突出してくれた

から、ほども様子も心得ずに、いきなり抱着いた。が船が揺れ

たから、肩をこつた手が、頸筋を抱いて、もろに、どきりと乗
 しかつた。何と何うも、柱へ枕を打ちつけて、男同士噛りつ
 いた形だから、私だつて馴れない事だし、先方も驚いた、その
 上に不意の重量で船頭どのが胴の間へどんと尻餅をついて一
 としほあ
 汐浴びて「此の野郎！」尤もだ、此の野郎は更めていふに及ば
 ず、大島川へざんぶ、といふと運命にかゝはる、土手をひた
 くとなめる浅瀬の泥へ、二人でばしやりと寝た。

「それから思ふと……いまの娘さんの飛乗は、人間業ぢやあ
 ないんだよ。」

「些と大袈裟ですなあ、何、あれ式の事を。……これから先、そ

の蓬菜町、平野町の河岸へ行つて、船の棟割といつた處
 をご覧なさい。阿媽が小舷から蟹ぢやありませんが、釜を出
 して、斜かひに米を磨いでるわきを、あの位な娘が、袖なしの肌
 襦袢から、むつちりとした乳をのぞかせて、……それでも女
 氣でござんせうな、紅入模様のもりんすを長めに腰へ巻いた
 なりで、その泥船、埃船を棹で突ツ張つてゐますから。――
 氣の毒な事は、汗ぐつしよりですがね、労働で肌がしまつて、
 手足のすらりとしてゐる處は、女郎花に一雨かゝつた形です
 よ。」

「雨は、お詠にしとくと降つてゐるし、眞個にそれが、凡夫の
 目に見えるのかね。」

「ご串談ばかり、凡夫だから見えるんできあね。——いえま
だ、もつと凡夫なのは、近頃島が湧いた様に開けました、疝
氣稻荷様 近くの或工場へ用があつて、私の知り合が三人連
れ圓タクで乗込んだのが、歸りがけに、洲崎橋の正面見當
へ打突ると、……凡夫ですな。まだ、あなた、四時だといふのに、
一寸見物だけで、道普請や、小屋掛でござつた返して、こん
がらかつてゐる中を、ブンく獨樂のやうにぐるぐるで、そ
の癖乗込む……疾いんです。引手茶屋か、見番か、左は？……
右は、といふうちに、——豫め御案内申しましたつけ、仲の町
正面の波除へ突き當つたと思召せ。——忽ち蒼海漫
々たり。あれが房州鋸山だ、と指さすのが、府下品川

だつたり何かして、地理には全く暗い連中ですが、蒸風呂から
 飛び上つた同然に、それは涼しいには涼しいんですとさ。……
 偏に風を賞めるばかり、凡夫ですな。巻煙草をふかす外に所
 在がないから、やゝあつて下に待たした圓タクへ下りて來ると、
 素裸の女郎が三人——この友だち意地が悪くつて、西だか
 東だか方角は教へませんがね、虚空へ魔が現れた様に、簾を拂
 つた裏二階の窓際へ立並ぶと、腕も肩も、胸も腹も、くな
 くと緋の切を巻いた、乳房の眉間尺といった形で揉み合つて、
 まだそれだけなら、何、女郎だつて涼みます、不思議はありま
 せんがね。招いたり、頬邊をたゝいて見せたり、肱でまいたり、
 これがまさしく、府下と房州を見違へた凡夫の目にもありく

と見えたんですつて。再び説く、天の一方に當つて、遙にですな。惜しいかな、方角が分りません。」

「宙に迷つてる形だね、きみが手をひかれた幽霊なども、或はその連中ではないのかね。」

「わあ、泥龜が、泥龜が。」

「あ、凡夫を驚かしては不可い。……何だか、陰々として來た。」

「丁ど此處だ、此處だが、しかし、油倉だと思ふ處は、機械びきの工場となつた。冬木で見た、あの工場も、これと同じものらしい。」

「つい、叱られたらあやまる氣で、伸上つて窓から覗いた。中で竹刀を使つてゐるのだと、立處に引込まれて、同伴が犬に

怯おびえたかはりに、眞ま庭には念ねん流りうの腕うで前まへを顯あらはさうといふ處ところである。
 久ひさしぶりで參さん詣けいをするのに、裏うら門もんからでは、何なぜ故がか不ぶ躑しつ躑け
 な氣きがする。木場きばを一ひとまはりするとして、話はなしながら歩ある行るき出だした。

「……蠱こといふ形かたちを、そのまゝ女をんなの肉にく身しんで顯あらはしたやうな、いまの話はなしで思おも出ひだすが、きみの方が友ともだちだから此こ方つちも友ともだちさ。
 以前いぜん——場ば所しょも同おなじ様やうだが、何なんとかいふ女ぢやう郎らうがね。一ちよつと寸と、その服なり装きを聞きいて覺おぼえてゐる。……黒くろの紹ろちり縮めん緬すその裾すそに、不しら知ぬ火ひのちらくと燃もえるのに……水みづ淺あさ葱ぎの麻あさの葉はの襟えりの掛かつた襦しかけ襦だて襦まきだとき。肉にく色いろ縮ちり緬めんの長なが襦じゆ袴ばんで、其その白しろ襦じゆ子すの伊だて達まき卷きを——
 そんなに傍そばへ寄よつちや不い可けない。橋はしの眞まん中なかを通とほるのに、邪じや魔まに

なるぢやあないか。」

下したを二ふた流ながし筏いかだがすべる。

「何なんだつけ、その襦し襦かけを屏びやうぶ風ふうへ掛かけて、白しろい切きれの潰つぶ島ぶし田たなのが

……いや、大丈夫だいぢやうぶ——惜をしいかな、これが心しん中ちゆうをしたのでも、

殺ころされたのでも、斬きられたのでもない。のり血べ更ぎらになしだよ。

(まだ學がく生せいさんでせう、當うち樓ろうの内ない證しよは穩おだかだから、臺だいのかは

りに、お辨べん當たうを持もつて入いらつしやい。……私わたしに客きやく人じんがあつ

て、退たい屈くつだつたら、晝ひる間ま、その間あひ裏らの土ど手てへ出でて釣つりをしておい

でなさいまし。……海かい津づがかゝります。私わたしだつて釣つつたから。……

……) 時じ候こうは暑あついが、春はる風かぜが吹ふいてる。人ひとごとだけれども、眉み

間けん尺じやくと較くらべると嘘うそのやうだ。」

「風葉さん、春葉さん、い、いづれですか、言はれた、その御當人は？」

「それは、想像にまかせよう。」

案内者にも分らない。

水の町の不思議な大森林は、皆薄赤く切開かれた、木場は林を疊んで堀に積み、空地に立掛けた板に過ぎぬ。蘆間に鷺の眠り、軒に蛙の鳴いたやうな景色は、また夢のやうである。

——鶴歩橋を見た。その橋を長く渡つた。名の由来を知りた

い方々、は、案内記の類を讀まるゝがよい。私はそれだからといつて、鶴歩といふ字にかゝづらふわけではないが、以前知つた時、この橋は鶴の首に似て、淡々たる水の上に、薄雲の月

更けて、頸を皓く眠つてゐた。——九月の末、十月か、あ
 れは幾日頃であつたらう。折から此の水邊の惠比壽の宮の町
 祭りの夜と思ふ。もう晩かつたから、材木の森に餌する鰐
 口の響きもなく、露地の奥から笛の音も聞えず、社頭にたゞ
 ひとつ紅の大提灯の霧に沈んで消残つたのが、……強ひて擬
 へるのではない、さながら一抹の丹頂に似て、四邊皆水。
 且行き、且、イむ人影は、斑に黒い羽の影を落して、橋をめぐ
 った堀は、大なる兩の翼だつたのを覚えてゐる。その時、颯と吹
 いた夜嵐に、提灯は暗くなり、小波は白い毛を立てて、
 空なる鱗形の雲とともに亂れた。

鶴の姿の消えたあとは、遣手の欠伸よりも殺風景である。

しかし思へ。鹿島へ詣でた鳳凰も、夜がなければ風説である。
 鶴歩橋の面影も、別に再び月の夜に眺めたい。

こゝに軒あれば、松があり、庭あれば燈籠が差のぞかれ、一寸櫺子のすき間さへ、山の手の雀の如く鳥影のさすと見るのが、皆ひらくくと船であつた。奥深い戸毎の帳場格子も、早く事務所の椅子になつた。
 けれども、麥稈が通りがかりに、

「あゝ、焼け残つた……」

私は凡夫だから、横目にたゞ「おなじ束髪でも涼しやかだな。」ぐらゐなもの、氣にした處で、ひとへに御婦人ばかりだが、同伴は少々骨董氣があるから、怪しからん。たゞき寄せた椅子

子すの下したに突つつ込こんだ、鐵てつの大火鉢おほひばちをのぞき込こんで、

「十萬坪じふまんつばの柑塙るつばの中なかで、西瓜すゐくわのわれたやうに焼やけても、溶とけ

なかつたんですな。寶物ほうもつですぜ。」

この不ぶ作さ法はふに……叱こゝと言ごもいはぬは、さすがに取とり鎮しづめた商あきうど人どの大氣たいきであらう。

それにしても、荒あれてゐる。野のにさらしたものの如ごとく、杭くひが穴あな、

桁けたが骨ほねに成なつた橋はしが多おほい。わづかに左さ右いうを殘のこして、眞まん中なかの渡わたり

の深ふかく崩くづれ込こんだのもある。通とほるのに危あぶなつかしいから、また踏ふ

み迷まよつた體ていになつて、一ひと處ところは泥すつぽん龜ごとの如ごとく穴あなを傳つたひ、或あるとこ

處ろでは、

「手てを曳ひいてたべ……幽靈いうれいどの。」

「あら、怨めしや。」

どろくどろと、二人で渡つた。

人通りさへ、稀であるのに、貨物車は、衝いて通り、駆け抜け

る。澁苦い顔して乗るのは、以前は小意氣な小揚たちだつたと

聞く。

たゞひとり、この間に、角乗の競勢を見た。岸に柳はないけ

れども、一人すつと乗つた大角材の六間餘は、引緊つた眉

の下に、その行くや葉の如し。水面を操ること、草履を突つ掛

けたよりも輕うして、横にめぐり、縦に通つて、漂々として浮

いて行く。

月夜に鶴歩橋を渡るなぞ、いひ出たのも極りが悪い。かの宋

の康王かうわうの舍人しゃじんにして、
 狷彭けんほうの術じゆつを行おこなひ、冀州きしう、涿郡たくぐんの間あひだ
 に浮遊ふいうすること二百年にひやくねん。しかして其その涿水たくすゐを鯉こひに乗のつた琴きん
 高うを羨うらやむには當あたらない。わが深川ふかがはの兄哥あにいの角乘かくのりは、仙人せんじん
 を凌駕りようがすること、竹たけの柄えの鳶とびぐち口約やくじつしやく十尺じふしやくと、加くはふるに、さ
 らし六尺ろくしやくである。

道幅みちはばもや、傾かたむくばかり、山やまの手ての二人ふたりが、さいはひ長棹ながざをに
 よらずして、たゞ突つき出だされた川筋かはすぢは、むかしにくらべると、
 (大だい)といひたい、鐵橋てつけうと註ちゆうし、電車でんしゃが複線ふくせんといひたした
 い。大汐見橋おほしほみばしを、八幡宮はちまんぐうから向むかつて左ひだりへ、だらくと下おりた
 一いつつくわく廓わくであつた。

また貨物車トラックを曳出ひきだすでもないが、車輪しゃりん、登音きやうおんの響ひびき渡わたる

汐見橋から、ものの半町、此處に入ると、今は壞れた工場
 のあとを、石、葉鐵を跨いで通る状ながら、以前は、芭蕉で
 圍つたやうな、しつとりした水の色に包まれつゝ、印絆纏で
 木を挽く仙人が、彼方に一人、此方に二人、大なる材木に、
 恰も啄木鳥の如くにとまつて、鋸の嘴を閑に敲いてゐたもので、
 ごしごし、ごしごし、時に鏝を入れて、カンと行る。湖心に櫓の
 音を聞くばかり、心耳自から清んだ、と思ふ。が、同伴の説は然
 うでない。この汐見橋を、廓へ出入るために架けた水郷の
 大門口ぐらゐな心得だから、一段低く、此處へ下りるのは、
 妓屋の裏階子を下りて、間夫の忍ぶ隠れ場所のやうな氣がした
 さうである。

夜更けて、引け過ぎに歸る時も、酔つて、乗込む時も。

大川此方の町の場所により、築地、日本橋の方からも永

代を渡るが、兩國橋、もう新大橋となると、富岡門

前の大通りによらず、裏道、横町を拾つて、入堀の

河岸を縫ふ。……晝も静かだ。夜の寂しさ。汀の蘆は夏も冷い。

葉うらに透る月影の銀色は、やがて、その蘆の細莖の霜

となり、根は白骨と成つて折れる。……結んで角組める鬚は、

解けて洗髪となり、亂れて抜け毛となり、既にして穂ととも

に塵に消えるのである。

それが枯れ立ち、倒れ伏す、河岸、入江に、わけて寒月の光

り冴えて、剃刀の刃の如くこぼるゝ時、大空は遙に蘆葦雜草

の八萬坪を透通つて、洲崎の海、永代浦から、蒼波品川
 に連つて、皎々として凍る時よ。霜に鳴く蟲の黒い影が、世を
 怨む女の瞳の如く、蘆の折葉の節々は、卒堵婆に、浮ばない
 戒名を刺青したか、と明るく映る。……そのおもひ、骨
 髓に徹つて、齒の根震ひ、肉戦いて、酔覺の頬を悚然と氷で
 割らるゝが如く感じた……と言ふのである。

ごかつて
 御勝手になさい。

此の案内には弱つた。——（第一、こゝを記す時、七月
 二十二日の暑さと言つたら。夜へかけて九十六度、四十年來
 のレコードだといふ氣象臺の發表であるから、借家は百
 度を超えたらしい。）

はや 早く 汐見橋へ 驅け上らう。

くる わ、くる わ。

ふね 船。

いかだ 筏。

みわた 見渡す、 へいきうばし 平久橋。 時雨橋。 一二筋、三筋、流れを合せて、

たうく 濤々たる 水面を、 いくそう 幾艘、 いくながし 幾流、 さいう 左右から寄せ合せて、

ごじふでんま 五十傳馬船、 ひやくでんま 百傳馬船、 だるま 達磨、 たかせ 高瀬、 ごみぶね 埃船、 だろぶね 泥船、 つりぶね 釣船も

とほ 遠く 浮く。 就 中、 いかだはし 筏は馳る。 水は瀬を造つて、 水脚を千筋

の綱に、 さらくくと音するばかり、 装入るゝ如く 川筋を上るの

である。 さし上る汐は潔い。

かぜ 風はひようくと袂を吹いた。

わたしは學者でないから、此の汐は、堀割を、上へ、凡そ、ど

のあたりまで淨化するかを知らない。

けれども、驚破洪水と言へば、深川中、波立つ湖となるこ

と、傳へて一再に留まらない。高低と汐の勢ひで、あの油

堀、仙臺堀、小名木川、——且辿り、且見た堀は、皆満々

と鮮しい水を流すであらう。冬木の池も湛へよう。

誘はれて、常夏も、夕月の雫に濡れるであらう。

「成程、汐見橋は汐見橋ですな。」

同伴が更めて感心した。廓へばかり氣を取られて、あげさげ

汐のさしひきを、今はじめて知つたのかと思ふと、また然うでな

い。

大欄干だいかんらん（此にも大がつく）から、電車でんしゃの透き間に、北きたし、
 東ひがしして、涼すずしくはあるし、汐しほの流れを眺ながめるうちに……一人來た、
 二人來た、見ぬ間に三人、……追羽子おひばねの唄うたに似て、氣きの輕さう
 な女たち、銀杏返いてふがへしのも、島田しまだなのも、ずつと廂ひさしがみ 髮かみなのも、
 何處いづこからともなく出て來て、おなじやうに欄干らんかんに立つて、しば
 らく川面かはづらを見おろしては、ふいと行く。——内證ないしよでお知らせ
 申まをさうが、海うみから颯々さつさつと吹通ふきとほすので、朱鷺とき、淺葱あさぎ、紅あざを、斜め
 に絞しぼつて、半身はんしんを翻ひるがへすこと、特に風かぜのために描ゑがいた女の蹴出けだしの
 繪ゑのやうであつた。が、いづれも、涼すずむために立ち停とまるのではな
 い。凡およそ汐時しほどきを見計みはからつて、橋はしに近ちかづく船乘ふなのり、筏師いかだしに、目許めもと
 であひづを通かよはせる。成程なるほど、汐見橋しほみばしの所以ゆゑんだ、と案内者あんないしやが

言ふのである。眞偽は保證する限りでない。

たゞ、涼々として大汐の上る景色は、私……一個人としては、船頭の、下から蹴出を仰ぐ如き比ではなかつた。

順は違ふが、——こゝで一寸話したい。——これは、後に、

洲崎の辨財天の鳥居前の、寛政の津浪之碑の前での事である。——打寄する浪に就いて、いま言はう。

汐見橋から、海に向つた——大島川の入江の角、もはや平

久町 何丁めに成つた——出洲の端に同じ津浪の碑が立つて居た。——前談、谷崎さんと活動寫眞の一行が、船

で来て、其の岸を見た震災前には、蘆洲の中に、孤影瑩然と

して、百年一人行く影の如く、あの、凄く、寂しく、あはれ
 だつた碑が、恰も、のつぽの石臼の如く立つて、すぐ傍には、
 ものほしさを洗濯ものが掛つて、象を撫づるのではないが、私た
 物干棹に洗濯ものが掛つて、象を撫づるのではないが、私た
 ちの石を繞るのを、片側長屋の小窓から、場所らしい、侠な娘
 だの、洒落れた女房が、袖を引合つて覗いたものであつた。――
 いまは同じ所、おなじ河岸に、ポキリと犀の角の折れた如く、淵
 にも成らぬ痕を残して、其の軀は影もない。
 や 焼けた水を、目前、波の鱗形に積んだ、煉瓦を根に
 して、卒堵婆が一基。―― 神力大光普照無際土消險。三垢
 冥廣濟衆厄難。―― しか／＼と記したのが、水へ斜に立つ
 て居る。

もつと、尤も、案内者といへども、汐見橋から水の上を飛んだので

はない。一度、富岡門前へ。……それから仲通を越中

島へ、蓬萊橋を渡ること——其の谷崎さんの時と殆ど同一

に、嘗て川へ落ちた客が、津浪之碑を訪ねたので、古石場、牡

丹町を川づたひに、途中、木の段五つを數へる、人のほか車は

通じない牡丹橋を高く渡つた。——恚う大りをしないと、

汐見橋から手に取るやうでも、碑のあとへは至り得ないのであ

る。此のあたり、船の長屋、水の家、肌襦袢で乳のむつちりし

たのなどは、品格ある讀者のお聞きなさりたくない事を信じ

て、先を急ぐ。従つて古石場の石瓦、石炭屑などは論じ

ない。唯一つ牡丹町の御町内、もしあらば庄屋に建言

したい事ことがある。場所ばしょのいづれを問とはず、一ひと株かぶの牡丹ぼたんを、庭にはな
 り鉢はちなりに植うゑて欲ほしい。紅こう、白はく、緋ひ、濃のう艶えん、淡たん彩さい、其その唯たゞ一い
 輪ちりんの花はな開ひらいて、臺うてなに金こん色じきの町ちやうめい名なを刻きざむとせよ、全ぜん町ちやう
 立たち處どころに樂らく園えんに化くわして、いまは見みえぬ、團だん子ご坂か、入いり谷やの、
 菊きく、朝あさ顔がほ。萩はぎ寺でらの萩はぎ、を凌しのいで、大だい東とう京きやうの名めい所しよと成なら
 う。凡およそ、その町まちの顯あらはるゝは、住すむ人ひとの富とみでない。ダイヤモン
 ドの指ゆび環わでない、時ときに、一ひと本もとの花はなである。
 やがて、碑ひのあとに、供く養やうの塔たふ婆ぼを、爲し出いだす事こともなく弔とむらつた。
 沈しづんだか、焼やけたか、碑ひの行ゆく方へを訪たづねようと思おもふにさへ、片かた
 側はのバラツクに、數かず多おほく集あつつたのは、最も早はや、女かみ房さんにも娘むすめに
 も、深ふか川がはの人ひとどころでない。百ひやく里くり帶たい水すゐ、對つ馬しまを隔へだてた隣りんご

國から入稼ぎのお客である。煙草を賣つて、ラムネ、サイダーを酌するらしい、おなじ鮮女の衣の白きが二人、箒を使ひ、道路に水を打つを見た。塔を清むるは、僧の善行である。町を掃くのは、土を愛するのである。殊勝のおん事、おん事と、心ばかり默禮しつゝ、私たちは、むかし蘆間を渡せし船板——鐵の平久橋を渡る。

「震災の時ではありませぬで、ついこの間、大風に折れましてな。」

同伴よ、許せ、赤ら顔で、はげたのが——蘆の根に寄る波の、堤に並ぶ蘆簀の茶屋から、白雪の富士の見える、こゝの昔を描いた配りものらしい——團扇を使ひながら、洲崎の辨財天の鳥

居外りゐそとに、石いしの柵さくを緩ゆるくめぐらした、碑ひの前まへに立つた時とき、ぶらりと來合きあはせて、六十年配ろくじふねんばいが然さういつた。

此處このところ寛政三年波わんせいさんねんなみあれの時とき、家流いながれ人死ひとしするもの少すくなからず、此この後高波のちたかなみの變へんはかり難がたく、溺死できしの難なんなしといふべからず、これによりて西入船町にしいりふねちやうを限かぎり、東吉ひがしき祥寺前ちじやうしまへに至いたるまで、凡およそ長さなが二百八十間餘にひやくはちじつけんよの處ところ、家居取いへあとり沸はらひ、空地あきちとなし置おくものなり。

寛政六甲寅十二月日

—— 小作中一度載之。—— 再録。——

せうさくちういちどこれをのす

さいろく

繰返すやうだけれども、文字は殆ど認め難い。地に二三尺

窪んだやうに碑の半は埋まつた。

——因ちなみにいふ、芭蕉ばせをに用ようのある人ひとは、六間堀ろくけんぼり方面ほうめんに行くが

よい——江戸えどの水みづの製造元せいざうもと、式亭三馬しきていさんばの墓はかは、淨心寺中じやうしんじちゆう雲光院うんくわうゐんにある。

さて、時ときを、いへば、やがて五時半ごじはんであつた。夏なつの日ひも、この梅雨空つゆぞらで、雨あめの小留をんだ間まも、蒸むしながら陰いんが籠こもつて、家居いへゐは沈しづみ、辻つじは黄昏たそがれた。

團扇持うちほもつた六十年ろくじふねんばい配ひとが、一ひとつ頸ぼんのくぼ窪くぼの蚊かを敲たいて立去たちさる

あとから、同伴つれは、兩切りやうぎりの煙草たばこを買かふといつて、弓ゆみなりの辻つじを、洲崎すさきの方ほうへ小走こばしりする。

ぼつねんとして、あとに、水を離れた人間の棒立と、埋れた碑と相對した時であつた。

皺枯れた聲をして、

「旦那さ——ん。」

「あ。」

思はず振向くと、ふと背後に立つて、暮方の色に紛るゝもの

は、あゝ何處かで見た……大びけ過ぎの遣手部屋か、否、四谷の

閻魔堂か、否、前刻の閻王の膝の蔭か、否。今しがた白衣

の鮮女が、道を掃いた小店の奥に、暗く目を光らして居た、鐵

あみを絞つたやうに、皺の敷を面に刻んで、白髪を逆に亂しつゝ、

淺葱の筒袖に黒い袴はいた媪である。万ちゃんの淺草には、

いしまくらひと石の枕の一つ家がある。安達ヶ原には黒塚がある。こゝのは僥倖に、檳榔の葉の様な團扇を皺手に、出刃庖丁を持つてをらず、腹ごもりの嬰兒を胞衣のまゝ掴んでもゐない。讀者は、たゞ凄く、不氣味に、靈あり、驗あり、前世の約束ある古巫女を想像さるればよい。なほ同一川筋を、扇橋から本所の場末には、天井の裏、壁の中に、今も口寄せの巫女の影が残ると聞く。

「水の音が聞こえまするなう。何處となくなう。」

「……………」

「旦那さ——ん、今のほどは汐見橋の上でや、水の上るのをば、嬉しげに見てござつた。……濁り濁つた、この、なう、溝川も、

堀も、入江も、淨めるには、まだく／＼汐が足りませぬよ、足りませぬによつて、なう、眞夜中に来て見なされまし。——月にも、星にも、美しい、氣高い、お姫様が、なう、勿體ない、賤の業ぢや、今時の女子の通り、目に立たぬお姿でなう、船を浮べ、筏に乗つて、大海の水を、さら／＼と、この上、この上に灌がつしやります事よ。……あゝ、有難うござります。おまゐりをなされまし、……おゝ、お連れがござりましたの。——おさきへ、ごゆるされや、はい、はい。」

と、鳥居も潜らず、片檐の暗い處を、蜘蛛の巣のやうに——衣ものの薄さに、身の皺を、次第に、板羽目へ掛けて、奥深く境内へ消えて行く。

「やあ、お待遠様。まちどほさま——次手についで嘖さへぶり新道じんみちとかいふのを、一ちよつとのぞ寸……覗きいて來たが……燕つばくろにしては頭あたまが白しろい。あはははは、が、驚おどろきました、露地口ろぢぐちに、妓生きいさんのやうなのが三さん人にんゐりましたぜ、ふはりくと白しろい服ふくで。」

——忘わすれたのではない。わたし私わたしたちは、實じつはまだ汐見橋しほみばしに、その汐しほを見みつゝ立たつてゐる。——

富岡八幡宮

成田山不動明王

境内けいだいは、土つちを織おつて白しろく敷しけるが如ごとく、人ひとまばらにして塵ちりを置おかず。神官しんくわんは嚴肅げんしゆくに、僧達そうたちは靜寂せいじやくに、御手洗みたらしの水みづは清すかつた。

たゞ納手拭をさめてぬぐひの黒くろく縋よぢれたのが、吹添ふきそふ風かぜに翻かつて、ぽたんと頬ほを打うつた。遊廓いうくわくの蠱こを談だんじて、いまだ漱そがざる腥なまぐさき口くちだ

つたからであらう。威ゐに恐おそれた事ことはいふまでもない。他たにも、なほ二三にさんの地ち、寺社てらやしらに詣まうでたから、太いたく汚よごれ垢あかづいた奉納ほうなふてぬ

手拭てぬぐひは、その何處どこであつたかを今いま忘わすれた。和光わくわう同塵どうぢんとは申まをせども、神境しんきやう、佛地ぶつちである。——近頃ちかごろは衛生ゑいせい上使じやうつかはぬ

ことにはなつてゐるが、單たんに飾かざりとして、甚はなはだしく汚よごれた手拭てぬぐひ

は、一い體たい誰たが預あづかり知しるべきものであるかを伺うかひたい。早はやい處ところは、奉ほう納なふをしたものが心こころして。……清せい淨じやうにすべきであらう。
 つしし 謹きんんで參さん詣けいした。丁ちやうど三さん時じ半はんであつた。まだ晝おひる飯ひるを濟すまし
 てゐない。お小こやすみかた／＼立た寄ちよつたのが……門もん前ぜんの、宮みや
 やがは 川がわか、いゝえ、木き場ばの、きん稻いねか、いゝえ、鳥とりの、初はつ音ねか、いゝ
 え。何ど處こだい！ えゝ、然さう大おほきな聲こゑを出だしては空すき腹ばらにこたへ
 る、何ど處こといひ立たてる程ほどの事こともない、その邊へんの、そ……ば……や……
 です。あ、あ。

「入いらつしやい。」

しかし、蕎そば麥や屋やの方ほうは威ゐ勢せいが好いい。横よこ土ど間まで逃あつらへを聞きくのが、
 まへはなを 前まへ鼻はな緒なをのゆるんだ、ペたんこ下げ駄たで、蹠あしのうらまつくろ 蹠あしの眞ま黒くろな小ち婢びとは撰たて

が違ふ。筋骨屈竟な壯伎が、向顛卷、筋彫ではあるが、二の腕へ掛けて、笛、太鼓、おかめ、ひよつとこの刺青の。ごむ底の足袋で、トンくと土間を切つて、「え、お待ち遠う。」懇に注文した、熱爛を驚掴みにしながら、框へ胸を斜つかけ、腰を落して、下睨みに、刺青の腕で、ぐいと突き出す——といった調子だから、古疊の片隅へ、裾のよぢれたので畏まつた客の、幅の利かないこと一通りでない。「饅頭を逃へても叱られまいかね。」
 「何、あなた。品がきが貼出してある以上は、月見でも、とぢでも何でも。」
 「成程。」

せまみせ
狭い店で。……つい鼻頭の框はなさきかまちに、ぞろりとした黒くろの紹縮緬ろちりめん

の羽織はおりを、くるりと尻しりへ捲込まきこむで、脹肥はちきれさうな膏切あぶらぎつた股またを、

殆どほとん付根つけねまで露出むきだしの片胡坐かたあぐら、どつしりと腰こしを掛かけた、三さん十じふ

七しつ八ぱちの血氣けつきざか盛り。遊び人あそびにんか、と思おもはれる角刈かくがりで、その癖くせパ

ナマ帽ぼうを差置さしおいた。でつぶりとして、然しかも頬骨ほほほねの張はつたのが、

あたり芋いもを半分はんぶんに流ながして、蒸籠せいろうを二枚積にまいつみ、種たねものを控ひかへて、

銚子てうしを四本並しほんならべてゐる。私わたしたちの、藪やぶの暖簾のれんを上げあげた時とき——その

壯佼わかもを對手あひてに、聲高こわだかに辯べんじてゐたのが、對手あひてが動うごいたため、

つと申絶なかだえがしたので。……しばらく手酌てじやくで舐なめながら、ぎろ

く、的あてのないやうに、しかしおのづから私わたしたちに瞳ひとみを向むける。

私わたしはその銚子てうしの數かずをよんで、……羨うらやんだのではない、酔よひの程度ほど

を計つたのである。成たけ背を帳場へ寄せて、窓越に、白く
 圓々と肥つた女房の襷がけの手が、帳面に働くのを力にし
 た。怯えたから、猪口を溢すと、同伴が、そこは心得たもので、
 二つ折の半紙を懐中から取つて出す段取りなどあり。

「やあ、……聞きなよ。おい、それからだ。しかし忙しいな。」
 私たちの逃へを一二度通すと、すぐ出前に——ポンと絆纏を
 肩に投げて、恰も、八幡祭の御神輿。(こゝのは擔ぐのでは
 ない、鳳凰の輝くばかり霄空から、舞降る處を、百人
 一齊に、飛び上つて受けるのだといふ)御神輿に駆け著ける勢
 ひで飛び出した。その壯伎の引返したのを、待兼ねた、と又
 辯じかけた。

「へい、おかげ様で。……」

「蕎麥は手打ちで、まつたく感心に食はせるからな。」

「お住居は兜町の方だとおつしやいますが、よく、此の邊が
 明るくつておいでなさいませぬ。」

「町内づきあひと同じ事さ、そりやお前、女が住んでる處だ
 からよ。あははは。」

「え、何うもお楽しみで。」

「對手が、素地で、初と來てるから、そこは却つて苦しみな。
 なさけくうもと」

情で苦勞を求めらんだ。洒落れた處はいくらもあるのに——だが、
 手打だから、つゆ加減がたまらねえや。」

天麩羅を、ちゆうと吸つて、

「何しろ、お前、俺が顔を見せると、白い頸首が、島田のおくれ毛で、うつむくと、もう忽ち耳朶までポツとならうツて女が、お人形さんに着せるのだ、といつて、小さな紋着を縫つてゐるんだからよ。ふびんが加はらうぢやねえか、えへツへツ。人形にぎやうのきものだよ。てめえが好い玩弄おもちやの癖くせにしやあがつて

「また、旦那、滅法めつぽふけえ界ほりだな掘出しものをなすつたもんだね。一ひとま町越ちこせば、蛤はまぐりも、蜆しじみも、山やまと積つんどぢやありませんが、問屋とんやにも、おろし屋やにも。……おまけに素人しろうとに、そんな光ひかつたのは見た事こともありやしません。」

「光ひかるつたつて硝子ビイドロぢやあねえぜ。……底そこに艶つやがあつて、ほん

のり霞かすんでゐる珠たまだよ。こいつを、掌てのひらでうつむけたり、仰向あふむけたり、一ピンといへば一ピンが出る、五ぐといへば五ぐが出る。龍宮りうぐうから授さづかつた賽さいころのやうな珠たまだから、えへツえへツへツ。」

「あ、旦那だんな、猪口ちよくから。」

「いろかごほごと……分わかつてる。縁起えんぎがなくつちやあ眞個ほんたうにはし

めえな。何どうだ？ 此これをみつけたのが、女衞ぜげんでも、取揚とりあげ婆ばあで

もねえ。盲目めくらだ。——盲目めくらなんだから、深川ふかがはな七不思議ふしぎの中うちだらう

ぜ。こゝらも流ながす事ことがあるだらう。仲な町まちや、洲崎すさきぢや評ひやう

判んの、松賀まつかち町やううらに住すむ大坊主おほぼうずよ。俺おれが洒落しやれに鶴賀つるがをかじ

つて、坊主ぼうず、出来できるから、時とき々／＼慰なぐさみに稽古けいこに行ゆくと思おもひねえ。

(親おやひとりこひとり、旦那だんな、大勢おほぜいに手足てあしは裂さきたくない、と申まを

しまするで、お情なさけを遣つかはされ。——かねて、熊井くまゐ、平久へいきう、平野らのしんみち、新道しんみちと、俺おれが百人斬ひやくにんぎりを知しつてるから、（特別とくべつのお情なさけを。）——よし來きた、早い處はやところを。で、どうせ、あく洗あらひをするか、湯ゆがかないぢや使つかへない代しろものだと思おもつたのが、……まるでもつて、其處等そこらの辨べん天てん……」

「あゝ、不可いけえ、旦那だんな、私あつしがこんな柄がらでいつちや、をかしいやうですがね、うつかり風説うはさはいけません。時々とき／＼、貴女あなたのお姿すがたが人目とめに見みえて、然しかもお前めえさん。……髪かみをお洗あらひなさる事ことさへあるツて言いひますから。……や、話はなしをして、裸體はだかの脇わきの下したが擦すつてえ。」

「それだよく、その通とほり、却かへつて結構けつこうぢやねえか。本所ほんじよの

ひとめ 一ツ目を見ねえな……盲目が見つけたのからして、もうすぐに辨
 んてん 天だ。俺の方でいほうと思つた。——いつか、連をごまかす都
 がふ 合でな、隙潰しに開帳さして、其處等の辨天の顔を見た
 おも と思ひねえ、俺の玩弄品に、その、肖如さツたら。一寸驚い
 おれ ちよつとおどろ
 おれ した。……おまけに、俺が熟と見てあるうちに、瞼がほツと來たぜ。
 おれ じつ
 まぶた

……ウ。」

ざくろ 柘榴の花が、パツと散る。

はなぢ 、「あ、衄血だ。」

「ウーム。」

あそ 遊び人の旦那は仰向に呻つた。夥多しい衄血である。丁ど手
 どんぶりなが にした井に流れ込むのを、あわてて土間へ落したが、蕎麥も天麩
 こ ちやうて

ぶらまつか
 羅も眞赤に成つた。鼻柱になほ迸つて、ぽたくと蒸籠に
 したより猪口に刎ねた血に、ぷんと、草の臭がした。

「お冷し申して……」

かみさん
 女房は土間へ片膝を下ろした。同伴も深切に懷紙を取つ
 て立ちかけたが、壯佼が屈竟だから、人手は要らない。肩
 ひつか
 に引掛けると、ぐなくと成つて、臺所口へ、薄暗い土間
 ゆ
 を行く。四角な面は、のめつたやうで眞蒼である。

わたし
 私たちは、無言で顔を見合はせた。

するだう
 水道の水が、ざあく鳴るのを聞きながら、酒をあまして、
 そばや
 蕎麥屋を出た。

じゆん 順はまた前後した。すさき 洲崎の辨財天に詣でたのは、こゝで 此處を出て

からの事なのである。

あや 怪しき媼の言が餘り身に沁みたから、えりみ あひ 襟も身も相ともに びきしま 緊張

つて、つれ 同伴が へづりじんみち のぞ 道 を覗いたといふにつけても、とき 時と場所

がらを思つて、おも なに はな 暮かけて扉なほ深い、てんによきぎはし 天女の階に

らいはい 禮拜した。

で、その しんみち 新道を横に……をぐりやながは 小栗柳川の漕がした船は、むかし

この岸へ當つて土手へ上つた、あが 河岸を抜けて、でんしや 電車に乗つた。

きばいちゑん 木場一圓、いちふねちやう 入船町を右に、ふなきばし 舟木橋をすぎ、しほみばし 汐見橋を二

どわた 度渡つて、まち 町はまだ明いが、りやうがは 兩側はみせごとのきごと 店毎軒毎にでんとう 電燈の

まばゆもんぜんちやう 眩い門前町を通りながら——なら 並んでは坐れず、むかあ 向ひ合つた同

伴と、更に顔を見合はせたが、本通りは銀座を狭くしたのとか
 はりのない、千百の電燈に紛れて、その蕎麥屋かと思ふ暖
 簾に、血の付いた燈は見えなかつた。

もんぜんなちやう

門前仲町で下りたのは

晩の御馳走……

……より前に、

名の

はまぐりちやう

おほしまちやう

蛤町、

大島町

かけて、

魚問屋の

活船に泳ぐ

活きた

鯛を、案内者が見せようといふのであつた。

裏道は次第に暗し、

雨は降る。……

……場所を何う

取違へたか、

浴衣の藻魚、帯の赤魚、中には出額の目張魚などに出逢ふのみ。

鯛、鱸どころでない。

鹽鰹

のほひもしない。弱つたのは、

念入に五萬分一の地圖さへ袂に心得た案内者が、

路は

悪くなる、暮れかゝる、活船を聞くのにあせるから、言ふこと

が、しどろもどろで、「何は、魚市は？……いや、それは知つ
 てゐますが、問屋なんで。いえ、買ひはしません。生きた魚を見
 るのでして、え、死んだ魚……もをかしいが、ぴちちと刎ねてる
 問屋ですがね。」——雑とこの通り。刎ねる問屋もまだ可かつた。
 「水をちよろくと吹上げて、しやあと落してゐる處ですがね。」
 「親方……」——はじめ黒船橋の袂で、窓から雨を見た、床
 屋の小僧に聞くと、怪げんな顔をして親方を呼んだ、が分らな
 い。——「兄さん、兄さん、一寸聞かがね。」二度目は蛤町
 ちやうにちやうめ
 二丁目の河岸で、シヤベルで石炭を引掻いてる、職人
 に聞いた時は、慚愧した。「水をちよろくと、しやあ？……」と
 まつくる
 眞黒な顔で問ひ返して、目を白くして、「分らねえなあ。」こ

れはわか分るまい。……

「きみ、きみ。……ちよろ／＼さへきはつ氣恥かしいのに、しやあと落おとすだけは何なんとかなるまいかね。あれを聞きくたびに、私わたしはおのづから、あとじさりをするんだがね。」

「卑怯ひけふですよ。……ちよろ／＼だけぢやあ意いをなしませんし、どぶりでもなし、滔たうたりでもなし、しやあ。」いふ下したから……「もし／＼失禮しつれいですが、ちよろ／＼、しやあ。……」

とほ通りがかりの湯歸りの船頭せんどうらしいのに叩頭おじきをする。

櫛くしまき巻まきを引詰めて、肉にくづきはあるが、きりゝ帯腰おびごしの引ひきしまつた、酒屋さかやの女房かみさんが「問屋とんやで小賣こうりはしませんよ。」「何どういたして、それ處どころぢやありません。密そつと拜見はいけんがいたしたいので。」「おや、

ご見物。」と、金の絲切齒でにつこりして、道普請だの、
 建前だの、路地うらは、地震當時の屋根を跨ぐのと同いで、分
 り悪いからと、つつかけ下駄で出て来て——あの蕎麥屋の女房を
 思はせる、——圓々した二の腕をあからさまに、電燈に白く
 輝かしながら、指さしをして、掃溜をよけて、羽目を つて、
 溝板を跨いで、ぐらく／＼してゐるから氣をつけて、まだ店開
 きをしない、お湯屋の横を抜けた……その突き當りまで、丁寧
 に教へて、「お氣をつけなさいまし、おほ／＼。」とあだに笑つ
 た。どうも、辰巳はうれしい處である。

問屋は、大六、大京、小川久、佃勝、西辰、ちくせ
 ん——など幾軒もある、と後に聞いた。私たちは單に酒屋の女

みさん
房にをそはつた通り、溝板も踏み返さず、塚にも似て空地の
あちこち蠍蛤の殻堆く——（ばいすけ）の雫を刎ねて並んだ
のに、磯濱づたひの思ひしつゝ、指さゝれたなりに突き當りの
問屋。……

みせさき
店頭なにに何もなない。幅はびろ廣ひろな構かま内うちの土間どまを真まむか向むかうに、穴あなぐ
藏くらが暗くらく、水氣すゑきが立たつて、突つき通とほしに川かはが透すく。——あすこだ。

あれだ。

のそくと入はひつた案内者あんないしやが、横手よこての住居すまひへ、屈かゞみ腰ごしで挨拶あいさつ
する。

「水みづがちよろしく。」

……をやつてゐるに違ちがひない。私わたしは卑怯ひけふながら、その町まちの眞まんな

中へ、あとじさりをしたのである。

「さ、おいでなさい、許可になりました。」

活船——瀧箱といふのであつたかも知れない。——が次第

に、五段に並んで、十六七杯。水柱は高く六尺に昇

つて、潺々と落ちて小波を立てて溢れる。——あゝ、水

柱といつて聞けばよかつた。——活船に水柱の立つ處と。

濡板敷のすべる足もとに近い一箱を透かすと、小魚が眞

黒に瀬を造る。

「泳いでゐます、鱈ですよ。」

「鱈だぜ。」

と、十五六人、殆ど裸にして、立ち働く、若衆の中の、若いのがいつた。

同伴は器用で、なか／＼庖丁も持てるのに。——これを思ふと、つい、この頃の事である。私の極懇意な細君で、もと柳橋で左袂を取つたのが、最近、番町のこの近所へ世帯を持つた。お料理を知つて、洗方に疎だから、——今日は——の盤臺を、臺所口からのぞいて、

「まあ、いゝ鮎ね。」が、鱧である。翌朝、「あら、活きた鯉ね。」と、いはうとして……昨日に懲りて口をつぐんで、一寸容儀を調べた、が黒鯛。これは優しい。……

信濃國蒲原郡産の床屋職人で、氣取つたのが、鮓は

屋臺やたいに限るかぎ、と穴子あなごをつまんで、「む、この鰯どぢやうはうめえや。」以もつ

て如何いかにとすると、うつかり同伴つれに立話たちばなしをすると、三十幾さんじふいくほ

本の脚あしが、水柱みづばしらに大搖おほゆれに搖ゆれて——哄どつと笑わらつた。紛まぎれ出で

た小鮓こだごが、ちよろくと板敷いたじきを這はつてゐる。

一 同いちどうは働はたらき出だした。下屋げやの水窓みづまどへ、折をりから横よこづけの船ふねから、

穴子あなご、ぎんぼうの畚びく、鰈かれひ、あいなめの鮓盤たこはん臺だいを、掬しゃくふ、上あげる、

それ抱だき込こむ、大鯛おほだひの澆はつらつ刺つたるが、(大盤だんべ臺だい)から飛とび上あがつ

た。

この勢いきほひに乗じようじて、今度こんどは、……そ……ば……や……ではない。社しゃの

高信たかのぶさんの籌ちうりやく略りやくによつて、一陣いちぢんの銳えい兵へいが懷ふところに伏ふせてあ

る。……敵てきは選えらばぬ、それ押おし出だせ、といふと、兜かぶとを直なほす、同伴つれの

頭あたまは黒く見える。

雨あめをおよぎ出した町まちの角かども、黒江町くろえちやう。火ひの見みは、雫しづくするばかり、水すゐ晶しやうの塔たふかと濡ぬれて光ひかつて、夜店よみせの盤はん臺だいには、蟹かにの脚あしが白しろく土手どてを築つき、河豚ふぐかと驚おどろく大鯛おほごちが反そつて、蝦えびのぶつ〜切ぎりが血ちを洗あらつた。

加賀家かがや、きん稻いね、伊勢平いせへいと、對手あひてを探さぐつて、同伴つれは、嘗かつて宮みや川はで、優やさしい意氣いきな人ひとと手合てあはせをした覺おぼえがあると頻しきりにはやつて、討死うちじにをしようとしたが。——御免ごめん下さい……お約やく束そくはしましたけれど、かう降ふつて來きては持もち出ださないわけには行ゆかない、蝙蝠傘かうもりにて候さくらふゆるゑ、近ちかい處ところの境内けいだいの初音はつねを襲おそつた。

「お任せ申まかす。」

「心得たり。」

こゝに至ると、——實は、二上りの音じめで賣つた洲崎の年増と洒落れた所帶を持つた同伴が、頭巾を睨いで、芥子玉の頬被した鶉に成つた。案ずるに、ちよろ／＼水も、くたびれを紛らした串戲らしい。

「……姉さん、一寸相談があるが、まづ名のれ、聞きたいな。」

をかしかつたのは、大肥りに肥つた、氣の好い、深切な女中が、ふふふ、と笑つてばかり、何うしても名告らなかつた、然もありなん、あとで聞くと、……お糸さん。

で、その、肥つたお糸さんに吞込まして、何でも構はぬ、深

川はで育そだつた土地とちツ子こを。――

若いわか鮮麗あざやかなのがあらはれた。

先まづは、めでたい。

うけて、杯さかづきをさしながら、いよ／＼黒くろくなつた鶉うが、いやが上うへにおやぢぶつて、

「姉あねさんや、うまれは、何處どこだい。」

聲こゑの下したに、かすりの、明石あかしの白しろ緋がすりで、十七だといふのに、

紅あかつけ氣けなし、薄うすい紫陽花色あぢさゐいろの半襟はんえりくつきりと涼すずしいのが、瞳ひとみを

ぱつちりと、うけ口くちで、

「濱はま通り……」

「はま通り？……」

「めいりやうかんけつ
明亮簡潔に、
はまぐりちやう
蛤町。」

昭和二年七月—八月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

初出：「東京日日新聞 第一八二七五号〜第一八二九六号」東京
日日新聞社

1927（昭和2）年7月17日〜8月7日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「串戯」と「串談」、「燈《ひ》」と「灯《ひ》」の混在は、

底本通りです。

※「女房」に対するルビの「にようぼう」と「かみさん」、「工場」に対するルビの「こうば」と「こうぢやう」、「兄哥」に対するルビの「あにき」と「あにい」、「旦那」に対するルビの「だんな」と「だな」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「深川《ふかがは》浅景《せんけい》」となつています。

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2018年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

深川浅景

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>